

『神話・伝承学への招待』

斎藤英喜編

思文閣出版刊

本書の刊行とともに、まずこの魅力的な書名に惹かれて買い求めた。しかも間を置いて、

また書名に惹かれて買ってしまいい、開いて二冊目であつたことに気付いた。それほど、この「神話・伝承学」というネーミングは興味深いものがある。しかも「招待」と銘打たれているが、中身はなかなか濃厚である。私がすぐ思いついたことは、説話・伝承学会における「説話・伝承」という概念は、口承によ書承にせよ説話という対象を、伝承という視点から捉えるという方法で、それとは全く違っているということだつた。

まちがいなく、本書は新たな研究領域の提示であり、新たな方法の提示でもある。まず編者の斎藤英喜氏の述べるところを追いかけてみよう。氏は「神話・伝承学」とは「日本神話と昔話・伝説と一緒に研究する学問」だという。しかも「神話学、国文学、民俗学、人類学、歴史学など」と従来「分断されてきた学問ジャンルを横断」し「新しい研究課題

を掘り下げようとする」「新しい「学問」のスタート」を祈念したものだという。そこにいわゆる「伝承」とは、神話以外の昔話や伝説などであり、いわば「神話」から「伝承」を読み解くという狙いがあるに違いない。そして常に「古事記」を根底に据えるという方法である。

例えば、「桃太郎」はなぜ桃から生まれ、鬼退治するのかという問いに対して、氏は答えて「古事記」の中に求めようとする。すなわち「イザナキを助けた桃の実」に「桃太郎のルーツ」を探す。そしてこの中国道教の桃の「信仰」が「古事記」に「うまい具合にミックスされて」いるという。そして古代の「追儺」から室町時代の『酒吞童子』や伊吹大明神を辿り「古代神話が中世に作り替えられた中世神話のバターン」を見てとる。「一寸法師」も「神の子」の「小さな姿」は、また「古事記」の「神話」にも出てくる」として「神仏の加護によって一族が繁栄する」という「中世固有な神話のバターン」が見取れるという（第一章「神話・伝承学とは何か」）。斎藤氏は第二章で、イザナキ・イザナミ、スサノヲ、オホクニヌシ、アマテラス、ヤマトケルという神格を丹念に紹介されて、『古

事記』とはどのような書であるか、「日本神話の魅力」とは何かを示しておられる。さらに、第一章では、『古事記』はいかに読まれてきたか」を歴史的に辿って行かれる。いふならば本書は、全体として、古代の『古事記』でもって中世以降の文学や文化の理解を覆していく企てでもある。

失礼ながら、紙幅の都合で他の章を細かく紹介する余裕はないが、シャーマニズム、神仏習合、沖繩、日・中・韓の比較、ギリシア神話から妖怪まで、章立てを見ると内容は実に幅広い。その壮大な構想も、編者である斎藤氏の考えに貫かれているに違いない。

国文学の私などから見ると、まちがいなく本書は神話学の書である。しかし閉じられた神話学ではなく、「神話・伝説・昔話」あるいは神社の成り立ちや神々の歴史を総合的、学問的に説明 紹介してくれる書物」をめざす（まえがき）、開かれた神話学の書である。ちなみに、興味深い「コラム」とともに、巻末に設けられた「ブックガイド」は、簡便にしてこの新たな学のある有益な道標であることとを申し添えておきたい。

（廣田收）

（二〇一五年九月／本体 三三〇〇円）

『増補新版 昔話にみる悪と欲望 継子・少年英雄・隣のじい』

三浦佑之著
青土社刊

本書は、一九九二年三月に新曜社から刊行された「昔話にみる悪と欲望―継子・少年英雄・隣のじい―」(ノマド叢書)に、「うさぎの快楽」「ウサギの快楽―昔話―カチカチ山の深層」「劇場文化」六号、静岡県舞台芸術センター、一九九八年二月、「昔話は残酷か」(石井正吉編「子どもに昔話を―」三弥井書店二〇〇七年)、「おじいさんとおばあさんの謎」「おじいさん」と「おばあさん」の謎―昔話の親族名称と爺婆の位相―「言語」二〇一七(特集・親族名称の謎)大修館書店、一九九一年七月)以上三本の文章を増補し、旧版に加筆訂正を加えたものである。旧版については、「口承文芸研究」十六号、一九九三年に野村敬子による「新刊紹介」記事が掲載されている。本書の「あとがき」には、著者の昔話研究の立ち位置の記された旧版の「あとがき」の一部が引用されているが、その中の一部を抜き出してみたい。「偶然に文字に記録されて残った古代の神話や伝承を読むのとおなじように、採録された昔話を読んできた。…略…

そこに収められた昔話群と向き合い、一つ一つの昔話はどのように読めるかということを考えてきた」とある。著者は、この昔話研究の方法を『金枝篇』の著者フレイザーになぞらえて、アームチェアー・アンボロジスト(安楽椅子人類学者)と謙るが、ここが本書の肝である。音声として存在していた昔話は、採録されて活字化された瞬間から「偶然に文字に記録されて残った古代の神話や伝承」と同じになるからだ。資料として編纂された昔話集にも古代の文献同様に編者によるバイアスがかかっているのだ。著者はそのことを専門の古代文学研究のテキストクリティックから知り抜いている。その著者が、本書において昔話研究の主題としたのが「昔話にみる悪と欲望」である。本書は、第一部「継子いじめ譚の発生」第二部「英雄譚のゆくえ」第三部「隣のじい譚のリアリティー」の三部と、先に記した三本の「増補」から構成されている。清貧な継子、知恵を駆使する英雄、正直な隣の爺など、清貧、智恵、正直を説くとされる昔話の主題を「悪と欲望」の側面から相対化する刺激的な試みを行っている。中古文学『落窪物語』や、上代文学『古事記』、『風土記』等とからめた昔話の分析は、二十数年経った今も古びていない。

『増補』に収められた三本の文章は、第一部

から第三部を補完するものとなっている。「うさぎの快楽」では、第二部「英雄譚のゆくえ」で触れなかった文化英雄(トリックスター)神話の主人公「うさぎ」について山口昌男『フリカの神話的世界』を参照しながら論じている。特に著者は、文化英雄としての「稲羽のシロウサギ」が、弥生時代以降に出現した国家的な性格をもつ文化英雄のオホナムチ(大國主)にその座を追われた、縄文時代以来の狩猟採集生活者の文化英雄ではないかと指摘する。「昔話は残酷か」は、第一部「継子いじめ譚の発生」で触れなかった、父親に手を切り落とされる継子譚「手無し娘」等の話を通して昔話の「残酷さ」について分析している。著者によれば、昔話の残酷と思われる場面は、聞き手には残酷とは意識されないといい。それは昔話が単純な物語の世界だからだと論じる。「おじいさんとおばあさんの謎」では、第三部「隣のじい譚のリアリティー」の補論として、昔話の主人公「家族を持たない爺婆」について分析している。著者は、「家族を持たない爺婆」は「モドキ」「ラコ」といった滑稽な性格で、共同体と異郷の狭間に位置する存在であり、また語り部でもあったと説く。

このように本書は、昔話研究のロールモデルの一つとなる重要な本である。(小堀光夫 二〇一五年十二月/本体二四〇〇円)

『呼び覚まされる 霊性の震災学』

3・11生と死のはざままで』(A)

『震災学入門 死生観からの社会構想』

(ちくま新書) (B)

(A) 東北学院大学 震災の記録プロジェクト

金菱清編／新曜社刊

(B) 金菱清著／筑摩書房刊

『呼び覚まされる 霊性の震災学』は、つぎの八章から構成されている。一章「死者たちが通う街―タクシードライバーの幽霊現象」(工藤優花)、二章「生ける死者の記憶を抱く―追悼／教訓を侵犯する慰霊碑」(菅原優)、三章「震災遺構の『当事者性』を越えて」(水上奨之)、四章「埋め墓／語り墓を架橋する―『両墓制』が導く墓守りたちの追慕」(斎藤源)、五章「共感の反作用―被災者の社会的孤立と平等の死」(金菱清)、六章「672ご遺体の掘り起こし―葬儀業者の感情管理と関係性」(小田島武道)、七章「津波のテッドラインに飛び込む―消防団の合理的選択」(小林周平)、八章「原発避難区域で殺生し続ける―猟友会のマイナー・サブシステンス」(伊藤翔太郎)。

章題が物語るように、「震災における死」がテーマといつてよい。編者の執筆による六章以

外は、すべて金菱清ゼミの学生が書いたもので、被災地域での度重なる調査を通して、実感した現実から各自の課題を読み解いている。

幽霊を車に乗せたという、数名のタクシードライバーからの聞き書きは興味深い(一章)。夏の夜、冬の衣装を身にまとった人物を乗せるが、途中でミラーに目をやると後部座席にいなかった。あるいは、目的地に到着すると姿が消えていたという。なかには、ブレゼントと思われる小さな箱が残されていたと語る例もある。これらの話は、世間話の話型としてみれば「消えた乗客」の域を出るものではない。ただ、それを自らが体験した出来事だったと認識している点が注目される。まさに、著者がいう「特異な幽霊体験」である。インタビューを重ねていくなかから、その背景には、突然この世を去らねばならなかった死者の無念の想いがあるのではないかという。昼夜をわかつた自由で町中を走るタクシードライバーたちが、亡くなった人の想いを伝達する媒体となった可能性が高いと推測している点は示唆に富む。

『震災学入門』は「はじめに」で示されているように、従来の災害への対処法の限界を明らかにし、それに代わる新しい取り組みと方法論を模索する書である。一章「いまなぜ震災学か―科学と政策を問いなおす」、二章

「心のケアー痛みを取り除かず温存する」、三章「霊性」生ける死者にどう接するか」、四章「リスクーウミ・オカの交通権がつかなくも」、五章「コミュニティ」『お節介な』まちづくり」、六章「原発災害―放射能を飼いつつ」から成る。災害の現場を歩くなかから思索し構想された知見で、これまでの説にはとられない、新しい発想や展望が随処に提示されている。

たとえば、幽霊を乗せたタクシードライバーの話について、著者は、幽霊とのあいだに境界を設けて排除するのではなく、「死者」と生者が行き来する相互交流の場としてとらえるべきだという。そこから、つまり彼岸と此岸が重なり合う場から何が見えるのか、その社会的な意味を考察している。また、十メートルを超える高い防潮堤を建設することについて、「海辺から人びとを引きはがすのは正しいのか」と問う。ウミとオカがまるで地続きのようにつながって共存してきた気仙沼の生活文化を検証しながら、その問題点を論じている。漁師は「海を望めるところに住みたいと必ず言う。起きてまず朝に海を眺めることで、その日の様子や、機嫌がわかる」との言葉は印象的である。(常光徹)

(A) (二〇一六年一月／本体二二〇〇円)
(B) (二〇一六年二月／本体七六〇円)

『雑談の美学 言語研究からの再考』

村田和代・井出里咲子編

ひつじ書房刊

本書は主に社会言語学者による「雑談」研究の論集である。討論や演説など制度的な談話に対して、「普通の会話(ordinary conversation)」の研究であり、日常の「話」を広く対象化しようになった昨今の「世間話」研究のフィールドと近接している。

全体は「序章」に続き、「第1部 制度的場面での雑談」「第2部 マルチモダリティと雑談」「第3部 関係性構築のための雑談」「第4部 ジャンルとしての雑談」で構成される。たとえば、第1部では模擬裁判員裁判という制度的な談話の場で、「雑談」が具体的にどのように生起し機能するか、両者の関係が問われる。第2部では、鮎屋のカウンターでの客と職人のやりとりや、四人の手話話者による会食中の雑談など、「しなながら」の会話が対象化される。特に後者では、基本的に一対一の対話型言語である手話の雑談において、参加者同士の行為と手話が重層的に展開する様が明らかにされる。第3部では、友人関係における雑談、チャットやLINEな

ど新たなメディアにおける雑談がとりあげられ、第4部では、アメリカにおけるスマートフォンとバンパステッカーという異なる私たちの「雑談」の共通性が探られ、また人を誹謗するゴシップの力学が分析される。

各論を通して焦点化されていくのは、日常に生起する微細なポリテクスと、関係性構築のダイナミズムである。そして十三件の論考の集積のなかに、「雑談」という談話の技術の役割と働きが、浮かびあがる。

こうした言語学的な談話分析にもとづく「雑談」研究が、口承文芸学へとどう接合しうるか、考えておかねばならないだろう。社会学のエスノメソドロジーにおける会話分析、社会言語学における「談話の民族誌(ethnography of speaking)」研究などは、口承文芸学と遠からぬ位置にある。特に後者は、一九七〇年代以降アメリカの民俗学で主流になった、「パフォーマンス」という概念による「場」や関係性のダイナミズムへの関心で先鋭化し、従来のテクスト中心の視点を相対化していった研究のベースになった。

ただ、本書における談話の記述の仕方は、口承文芸学と随分と違いがある。取められた各論考には、それぞれ記述に使われた記号の一覧が付され、日常の何気ない会話のことは遣い、息遣いや間が、ピンセットでつまむよ

うに取り出され分析されていくのである。本書に収められた論考も、昨今の口承文芸学と同様に、録音・録画メディアを使うことを前提にしている、というより、その精緻な記述と分析自体が、そうした記録メディアの存在により初めて可能になったのである。おそらく口承文芸学と、この雑談の言語学的研究は、同じメディアを使いながら、そこに異なった態度・方法を立ち上げている。

大きな違いは、口承文芸学はそこにとどのような「話(story)」があるか、しばしば調査者が分節しているのに対して、この言語学の雑談研究は、トピック自体がその場で創られ認識され共有されていく、その微細な過程を問う。たとえ研究者がその談話の場に参与していても、記録メディアを媒介に徹底して外から観察する態度に貫かれている。

我々の口承文芸学において、話の場に参与する研究者自身の「聴き耳」による「話」の分節を重視することも、実は決して自明ではないことがわかる。そのことの意味と可能性を、もう一度認識し直すとともに、こうした言語学的談話研究とどのように切り結んでいくことができるのか、または互いに同床異夢なのか、真剣に向き合う必要があるだろう。

(重信幸彦)

(二〇一六年二月／本体二八〇〇円)

『北陸の民俗伝承 豊饒と笑いの時空』

松本孝三著

三弥井書店刊

本書は、長年、口頭伝承分野の諸相を追究してこられた松本孝三氏の論攷集である。伝承のフィールド・ワークが難しくなった今こそ、それを基盤にした研究足跡を次世代に残すことが重要だと、松本氏はいう。

I 「昔語りの伝承世界」語り手の担う文化力
—南加賀の昔話から見える世界— / 声と語りが織りなす昔話の時空—異界との交錯— / 「愚か村話」の語られた時代—「雲洞谷話」—「在原話」—「下田原話」を中心に— / 若狭路の民間説話

II 「北陸の西行伝承」民俗社会の中の西行伝承—若狭・越前を中心に— / 民間説話の中の西行—越中・加賀を中心に—
III 「加賀・能登のまつりをたずねて」加賀の竹割り祭・グズ焼き祭 / 能登・富来のくじり祭
IV 「昔話資料 中島すぎ嶋の昔話(選)」
という四部構成。

書名の副題にある「豊饒」をキーワードに見渡すと、巻末に収録された中島すぎさんの語りが表示するように、口伝えの話の豊かさがあ
る。あるいは話そのものが招く豊かさもある。

「一粒の豆が千粒になれ、一粒の豆が千粒になれ」という唱え文を言うと、たった一粒の豆が鍋いっぱいになり、それを白で搗くといっぱいの粉になる。そのたくさんの粉が爺と婆のおかしみに満ちた性的なやり取りに繋がっていく。そんな伝承の場で、語り合
いながら、笑い合っていた暮らしに込められていたのは人々の豊饒への祈りだという。

声に出して語ることで、台風を撃退する
ために大声を発したという江戸時代から続
く事象を挙げて、目に見えない異界の存在と
対峙するときに、声の呪力が機能すると教え
てくれる。今の私たちは声の力を自覚するこ
とはほとんどない。昔話の「声と語り」が有
機的に生かされていたことをきちんと受け止
め、理解しておくことが重要だと指摘する。

時代のありようと人間の根源にかかわる
話として、愚か村話があろう。笑われる側の
反骨精神が新たな笑い話を育てた面もある半
面、その背後には単に笑話として済まされな
い厳しい実態があるという。それらの「笑い」
には陰湿な「開けない心」があって、笑う側
の内面にも深くつながるとの指摘は、自分と
違うものを笑う現在の社会問題にも重なって
くる。「私はこれまで、昔話調査をする中で
資料自体が語ることに耳を傾けるようにして
きました。それは取りも直さず、民俗社会に

生きる人たちの生の声を聞くと「言う嘗みでも
ありました」とあるように、残された記録の
文言からのメッセージを聞き取る重要さを改
めて思う。

II 章、北陸にも多く伝わる西行伝承は、古
典文学に源を見るものや、西行と同じく廻国
者として生きた人々が成立させたものもあ
りという。様々な土地に広く受け入れられた
西行伝承は複雑な様相を呈しているが、受け
入れた土地の文化、あるいは担い手を考えて
いくことが解明への鍵となる。その為には、
個々の事例を丹念に見て、一つ一つの積み重
ねが大事だという。

本書で示された伝承世界は北陸の実態だけ
に収まらない。「わずかに南加賀という狭い地
域の伝承であり、限界を通り越してもはや消
滅し始めている小さな世界の伝承一つが、大
きな広い世界の伝承と深く関わって」いるし、
「民俗社会に生きた大多数の人々が創り出し、
営々と受け継いで来た文化的地層の厚みこそ
が、実は一国の文化の総体なのであり、その
豊かさを形作っている」からである。松本氏
の言葉の重さに向られる。日本中で進行して
いる伝承の消滅と失うもの大きさを、私た
ちは厳しく認識しなくてはならない。

(中村とも子)

(二〇一六年二月 / 本体二五〇〇円)

『博物館という装置 帝国・植民地・アイデンティティ』

石井正己編
勉誠社刊

これまで、朝鮮半島、台湾、南洋群島など、旧大日本帝国の植民地における昔話調査や、その教科書など教育への利用についての研究プロジェクトを精力的に進めてきた編者が、近代の文化政策の要ともいえる博物館という装置の調査研究に行き着くことは必然的であったといべきだろう。

博物館は、万国博覧会と兄弟関係にある近代の視覚の装置である。広くモノを収集し、それを一つの体系のもとに分類し表象する。何をどのように収集し分類し、何を可視化するのか、十九世紀の西欧の万国博覧会が、各国の産業と文化の力を誇示し、またそれぞれの植民地を表象化することで外への力を誇示する政治的な装置であったように、博物館もまた、その存在そのものが政治である。

本書には、十六件の論考と五件のコラムが集められ、編者の石井による遠野の伊能嘉矩の台湾コレクシオン、ネフスキーのオシラサ

マへの眼差しを帝国の近代に切り結ぶ「序」に続き、六つのパートで構成される。「I 帝国主義の欲望を担った博物館」では、帝国日本の博物館について日本の博物館の起源と、植民地の博物館の展開をめぐる議論の見取り図を示し、「II 帝国日本で生まれた博物館の歴史」で、シルクロードと奈良をつなぐ正倉院が近代史のなかで媒介した世界像、渋沢敬三の「日本実業史博物館」構想と彼の農林水産への関心の接合、今日の国立民族学博物館へつながる保谷の旧民族学博物館の歴史における位置づけなどが問われる。

「III 帝国日本が営んだ外地の植民地博物館」では、台湾総督府博物館、朝鮮半島における朝鮮総督府博物館をはじめとする展示施設、樺太庁におかれた博物館、そして日本の傀儡であった満州帝国の国立博物館などがとりあげられ、それぞれの植民地の在りようのなかで、博物館の設置、収蔵物の収集と分類そして帝国のなかで担わされる役割が異なることが浮き彫りになる。「IV 帝国の進出と収集されたコレクシオン」では、旧ロシア帝国の博物館が議論される。十五世紀以降の遠征と調査、入植のなかで、どのような文化接触があり、それがロシア帝国の博物館のかたちとしてど

のように表象されたのが論じられる。そしてそのロシア帝国の視線のなかにアイヌ民族がどのように捕捉されたか論じられる。

「V ローカルは博物館とグローバルな博物館」では、現代の独仏の博物館が対象になる。ドイツ統一後の旧東ドイツ地域につくられる野外博物館が、社会主義政権により平板化されてしまった地域の特質を再発見していく拠点になっていることや、フランスで、グローバルイズムのなかで、国民国家を前提とした博物館が地中海文明という新たな脱国民国家の枠組みへと転換してリニューアルされた事例が論じられる。

近代から現代まで、旧帝国日本を中心に西欧の博物館まで視野に収め、その支配と統治の装置としての本性がえぐりだされる。

終章である「VI 文化財返還の根拠と歴史を逆なでする博物館」は、こうして帝国主義をくぐった博物館の歴史を問うことが、今なお解決されずにいる文化財返還の実践の根拠をつくるという現在の意義を語る。日本の博物館や大学に「収蔵」されている、帝国日本の暴力の産物の多くが、いまだに返還されていないという事実が、重い。

(重信幸彦)

(二〇一六年三月／本体四二〇〇円)

『柳田國男と考古学』なぜ柳田は考古資料を収集したのか

設楽博己・工藤雄一郎・松田陸彦編著
新泉社刊

およそありそうもない姿を、民俗学史上でイメージすると「自ら収集した土器石器を手にして考え込む柳田國男」などは、その最たるものだろう。日本人の「心意現象」の解明を課題とし、それがゆえに渋沢敬三や柳宗悦らのモノを重視する研究にスタンスをとった柳田が、ましてや考古資料に目を向けそうにはどうして思えないのだ。

だが。それは柳田の到達点をすでに知っている、ある種、歴史の特権的な立場に立っている私たちだからこそ、はまり込む陥穽なのだ、ということを書き「柳田國男と考古学」は思い知らせてくれる。日本人の心意伝承、端的には「固有信仰」の解明に尽力するに至るまで、柳田の中でいかに多くの紆余曲折、埋もれていった萌芽的関心があつたかは、ともすれば今の私たちは見失いがちだ。

柳田の考古学への関心は、そうした紆余曲折を示すポイントの一つだ。本書は柳田がなぜ考古資料を集めていたのか、その学問的・

社会的背景はどのようなものかを踏まえ、たうえて、柳田が最終的に「民俗学」と名指される学問を形成していく姿を、考古学とのスタンスも踏まえて押さえていく。一五〇ページほどのコンパクトな分量ながら、中身は濃い。しかも全編カラーページなので、柳田自らが手にした石器や土器がより、リアルに見る者に伝わってくる。

柳田にとって、考古資料とはどのような意義を持つものだったのか。その収集時期は明治後半に集中する。本書によれば、柳田が「天狗の話」を皮切りに、山人関係の論文を立て続けにまとめ、山人が先住民の生き残りという仮説を立てていったのがこの時期なのだ。それは人類学会でアイヌ・コロボックル論争や固有日本人論などの日本人種論が大きくクローズアップされていた時期とも、符合する。

国家的な動きに目を転じれば、日露戦争による樺太の割譲、日韓併合という東アジア社会の激動の中で、「日本人とは何か」という自らのアイデンティティが、否が応でも問われる時代だったのだ、と本書は明かす。柳田が考古資料を収集した背景には、このような時代の強い要請があつたのである。

とはいえその後、形質人類学による調査が進展するとともに、柳田は自らの山人論を放

棄することになる。また大正時代中期となると、考古学への批判が展開されていく。その骨子はたとえば一部の資料だけで歴史を語れるのか、生活史を重視していないといったもので、それは自らの学を打ちたてようとする軌跡と表裏一体をなすものだ。本書は位置づける。考古学という補助線を引くからこそ、見えてくるものが、ここからは見事に浮かび上ってくる。

柳田を論じるとき、私たちはともすればすでに出来上がった柳田像にしか、目が向かない。だが東アジアの激動する状況のもとで、日本人種論を通して自国のアイデンティティ確立を目指す柳田、あるいは自らの学を樹立せんがために考古学を仮想敵として苦闘した柳田の姿は、なかなか視野に入ってこない。

いうまでもなく、柳田は自ら生きる同時代の規定を強く受け、それを十分に自覚しつつ思考をつむぎだしていったのだ。本書から浮かび上がるのは、時代と誠実に向き合い苦闘する柳田の姿である。それと同時に今、口承文芸研究に携わる者はどれだけ同時代と真摯に向き合っているのか、という問いを本書は静かに投げかけているのだ、と自戒を込めて受け止めた。

(二〇一六年五月／本体二二〇〇円) (矢野敬二)

『野村純一 怪異伝承を読み解く』

大島廣志編
アーツアンドクラフツ刊

野村純一は、昔話はもちろん、伝説、世間話など、オールマイティに口承文芸研究を展開していた。本書は、そんな野村の怪異伝承に関する論考・エッセイを取めたアンソロジーである。

「怪異伝承と都市伝説」の章では、「一寸怪」の素姓「未来を予言する一件」「都市型妖怪「口裂け女」」「ニャンバーガーは猫の肉」が取められる。いわゆる「都市伝説」とジャンル分けされる題材を扱いながら、古い民間習俗などを比較材料に、その意味付けを行っている点が特徴といえよう。

「怪異を語る昔話」の章では、「一眼一脚神の消息」「山姥と桶屋」の素姓、「女房の首」の話―町の昔話「昔話と鬼」が取められる。前者二つは、昔話として位置づけにくい話柄を、後者は昔話の鬼を修験道と結びつける論考である。伝承資料に精通した野村ならではの資料提示の作法がうかがえる。

「怪異伝承と民俗」の章では、「七不思議とは何か」「世間話と「こんな晩」「子育て幽霊」の来る夜―胎児分離習俗を巡って」「百

物語の位置―話の場とその設定」が取められる。ここでも、取り上げる題材に関する伝承資料を網羅的に並べて、重なり合う側面から秘められた意味を焙り出そうとする。

こうした野村の研究の意義については、四人の書き下ろし論考エッセイが捕捉する。

大島廣志「怪異伝承論」の周辺」は、「昔話・伝説・世間話・都市伝説はあくまでも研究のための分類であって、(略)現場を大切にする野村の探究心は口承文芸全般に及ぶ。(略)野村が研究者として異彩を放つのは、何にでも対応できる思考の柔軟性にあるだろう」。「古典から近代の文章、現代の伝承まで幅広く資料を提示し、話の歴史性を明示している。つまり、文献と伝承の双方から都市伝説を取り上げ論述しているところに、他の研究者の及ばない野村学というべき独自性を看取できる」とする。

飯倉義之「口裂け女の誘い」は、野村の世間話研究は早くから行われていたが、一九八〇年代に画期があったとし、その背景に松谷みよこの「現代の民話」収集と、若手研究者による世間話研究の勃興があったとする。江戸っ子の末裔だった生活史との関わり、教育者として「後進にむけての問題の登録」という意識があったのではないだろうか」との指摘も首肯できるものといえる。

米屋陽一「野村語録」から見た野村学」は、「無数の「ハナシ」がひっそり息づいている。野村純一は、それらの話群に積極的に聴き耳を立て、研究対象として位置づけ考察した。あるいは、従前の口承文芸の概念、解釈を再検討し、新風を吹きこんだ。日本人の心意伝承、文芸伝統を明らかにするための手立てであった」と捉える。

野村典彦「父・野村純一」は、父と同じ質問の道をたどる子息から見た野村論として読ませる。「文字を持たぬ人々の楽譜を文字として提示することによって、無文字の文学の意味を認めさせようとする学問」が「かたり」＝「昔話」研究、「聞き手を喜ばす」「コード進行」を探るものが「はなし」＝「世間話」研究であったとし、「江戸の「はなし」と江戸の人付き合いを基層に持つ者が、文字を持つため「かたり」の重要性を確立しようとするもの」「語り手と向き合い、情を働かせて構築した学問」が野村の学問だったとする。

本書は、怪異伝承を研究する者に、研究史的にも方法的にも必読の論考を簡便に読めるものであると同時に、口承文芸研究に携わる者に、学問に対峙する姿勢を内省すること促す道標ともなる良書といえよう。

(根岸英之)

(二〇一六年七月/本体一八〇〇円)

『折々の民俗学』

常光徹著
河出書房新社刊

いわゆる「学校の怪談」の発見者で、民俗学における妖怪やしぐさをめぐる研究を牽引してきた著者が、ふるさとの『高知新聞』紙上に連載した「暮らしの風景」が一冊にまとまり、本書『折々の民俗学』となった。著者にとつて新聞連載は二回目だが、最初の連載も『うわさと俗信―民俗学の手帖から』としてまとめられ、本書に先行して再刊されている。

著者は高知県出身で、この連載を機に「これまでの経験を思い起しながら、自分なりに身近な生活のいとなみを注視してみたい」（あながき）と考えたという。著者が高知を離れたのは高校を卒業した時点だというから、それなりの歳月が流れている。しかし少年時代から青年期の初めまでを過ごした高知での経験と印象は鮮烈で、さまざまな伝承と民俗のなかでの生活であったことがうかがえる。そしてそれが著者の人間性や感性の基盤となっ

ているのであろうことは容易に理解できる。本書が民俗学の書物として見事なのは、そうした自分自身の経験を見事に客観化し、一定の距離を保って切り取って見せてくれる点である。

ここには四八篇の暮らしの風景が切り取られているが、どこから読んでもよく、決して大上段にふりかぶるわけではないが、日常生活のなかにひそむ伝承の面白さや不思議さが存分に語られている。日々の忙しさに追われて通常では見逃してしまふようなことばやしぐさ、言い回しや行動を著者は、さりげなく、すくい上げ、話題にしてくれる。本書の中には、著者と杯を交わしているような、ゆつたりとした感覚とのんびりとした時間が流れている。学会での研究報告や論文ではないから、まず、その面白さをじっくり味わうことが第一で、理屈や議論は、後からじんわりとついて来るのである。

本書で取り上げられているのは著者の感性と人間を育んだ高知での伝承を軸に、その後の関東での学生生活とその後の教師としての体験、研究機関や共同研究での個人的な見聞であるが、それらが実は日本全体やアジア世

界にも通じる民俗学の重要な課題に結びついている場合も少なくない。しかし、そうした話題やテーマがあつても、著者の筆致は決して大げさな、硬直したものにはならない。時には物足りなさを感じるほどの淡々しさ、しなやかさで話題が展開していく。

また本書は、「暮らしの風景」の第一部「春から夏へ」、第二部「秋から冬へ」に続いて、第三部では土佐宇佐村の浄土真宗寺院真覚寺の住職であつた井上静照の日記を扱う。生活のなかの伝承から幕末の僧侶が書き残した記録へと素材は転換するが、著者の筆致は変わらない。それに安心して身を任せているうちに、時空を隔てた人間とその生活への共感が浮かび上がってくる。

ただし、「あながき」に「時代や社会とも常に変容してゆく当たり前の生活文化を、眼前の『民俗』として発見していく力の衰え」というくだりにまで読み進むと、この著者の眼力の凄味に改めて気づかされる。まさに民俗を「発見」する力、その模範をここに見出すことができるのだ。

(小池淳一)
二〇一六年七月／本体一五〇〇円

『セーシエルの民話Ⅰ』^①
 『セーシエルの民話Ⅱ』^②
 『コモロ諸島の民話Ⅰ』^③ ガンガジヤ方言民話
 『コモロ諸島の民話Ⅱ』^④ ムワリ島方言民話
 『マダガスカル』^⑤

①・② 小田淳一編訳

③ 小田淳一、花淵馨也、サリム・ハチュ
 プ、アブドゥ・バカル・サイード編訳

④ 深澤秀夫、ミシエル・ラザフィアリヴニ
 編訳

ともに東京外国語大学
 アジア・アフリカ言語文化研究所刊

セーシエルは、インド洋の中西部にある大小合わせて一〇〇を超える島々から成る人口約九万人の国だ。モーリシャスとともに、アフリカ諸国のなかで一人当たりの国民所得が最も多い、比較的豊かな国だ。一七五六年にブルボン王朝のフランスが領有を宣言し、

ヨーロッパ向けの香料生産が盛んになったが、一八一四年にイギリスが領有を宣言した。魚、コブラ、シナモンの輸出が盛んで、日本は冷凍魚の輸入量が多く、セーシエルにとって二番目の輸出国であるという。

小田淳一編訳『セーシエルの民話Ⅰ』『セーシエルの民話Ⅱ』には、おそらくブルボン朝時代のフランス語が基盤になって形成されたセーシエル語という珍奇な言語と日本語の対訳による、荒唐無稽なお話の数々が収められていて、読者は知らず識らずのうちに、何とも言えない不思議な世界に連れ去られる。

花淵馨也その他の人々の協力を得て書かれた『コモロ諸島の民話Ⅰ』と『コモロ諸島の民話Ⅱ』も、現地語のローマ字化されたテキストと日本語の対訳で刊行された、世界で初めての刊行物であろう。

川田の、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所勤務時代の同僚として、アフリカ・モシ王国の大鼓言葉のデジタル分析という世界で初めての作業を、音響分析の専門家山本順人と一緒に、川田を代表として科研費で一年間行なった（一九九六年AA研刊）のも、へんな言語媒体に強い好奇心をもつ小田

の協力なしにはできないことだった。

深澤秀夫／ミシエル・ラザフィアリヴニ編訳『マダガスカル』の民話Ⅰ』も、セーシエル語やコモロ語に比べれば整備されているマダガスカル語で、AA研の深澤とアンタナナリヴ大学のラザフィアリヴニが、直接再録して日本語の対訳をつけたものだ。直接採録の成果である点で、小田の民話集とは別の独自の価値をもつ刊行物だ。

ここに紹介した本は、私たち日本口承文芸学会の会員にはあまり馴染みのない分野の民話集だが、民話の事例としては極めて貴重なものである。国立研究所発行の非売品ではあるが、手許に置いて是非熟読したいという希望者があれば、刊行元のアジア・アフリカ言語文化研究所に、本欄の紹介でこの本を知って是非読みたい旨を添え、申し込んでほしいので付記する。

「AA研出版物の入手方法とお問い合わせ」
<http://www.aatufs.ac.jp/ja/publications/inquiry/>
 を参照。

（川田順造）

① 二〇一四年三月／非売品

② 二〇一五年三月／非売品

『神々と精霊の国 西シベリアの民俗と芸能』

星野紘・齋藤君子・赤羽正春編著

池田哲夫・山田徹也著

国書刊行会刊

本書は、ウラル山脈東側の西シベリアに住むウラル語族の少数民族、ハンテ人・マンシ人について、その民俗文化を日本に初めて包括的に紹介する研究書であり、貴重な調査記録を収めている。

第一部「熊祭り」と芸能」は民俗芸能の研究者、星野紘氏が主に担当し、一九九八年十二月に西シベリアを南北に流れるオビ川中流域の孤絶した雪原で四日間に行われた熊祭りの概要を記述している。森で殺害した熊を小屋に運び入れる儀礼に始まり、殺された熊が自らの生涯を語る歌などが、狂言のような冗談演目を挟みながら演じられる。日を追って祝福の踊りを披露する川や森など地域の精霊の登場が増え、最終日にはより高位の抽象的な精霊（神）の順番となる。

続けて、星野氏は折口信夫の「まれびと」論、ユーラシア諸民族に伝わる英雄叙事詩やアイヌのユーカラとの比較を通して、ともに一人称で語られるアイヌの熊のカマイユーカラとハンテ人の熊祭りの歌の類似性に着目。著者によれば、両者は生理的な死（殺害）と祭りを閉じる儀礼的な死との二度の死のプロセスを経て熊を霊化

するという構造を持っており、「まれびと」信仰とは異なり自然崇拜に近いものである。また、ハンテ人の神観念においてはシャーマニズムの垂直的な世界観よりも、神霊・精霊の存在や事績が具体的な地名と結びついている水平的な世界観の方が明らかに優勢であり、原初的ではないかと指摘している。

さらに、獅子殺しの残滓を残す日本の獅子舞、ユーラシア農耕民に広く分布し人間主体の観点を持つ暴れ牛の儀礼と熊祭りの相違、ハンテ人の熊祭りにも認められる神がかり的な旋回舞踊のユーラシアでの分布を論じ、多様な観点からユーラシア規模の民俗比較研究の可能性を探っている。

第二部「伝統的な世界観」と口承文芸」では、ロシア・シベリア口承文芸の研究者、齋藤君子氏がハンテ人・マンシ人の習俗、宗教、物語ジャンルについて概説し、ロシア民俗学研究者の山田徹也氏が精霊信仰、怪異譚について紹介している。二人は二〇一三年九月、星野団長率いる現地調査に参加し、オビ川中流域のカズイム村等で古老から採録を行った。その際の貴重な記録や数多くのロシア語文献に基づき、「熊の歌」をはじめとする十数編のテキストが全訳されており、それだけでは理解しづらい内容が丁寧な解説も付されている。齋藤氏も垂直構造と水平構造に触れ、インド・イラン文化の影響を受けたとされる前者に対し、後者は本来のシ

ベリア的世界観であって、天界がオビ川上流の南の地に、死者の住む地下世界が北のオビ川河口に対応するとしている。

第三部「狩猟漁撈」を主に執筆した、シベリアと日本の文化史研究に携わる赤羽正春氏も二〇一三年の調査に参加し、危険な沼沢地を越えてタイガの野営地を訪問調査した。ふんだんな写真資料と共に野営地での生活や狩猟・漁撈の技術を詳しく紹介し、特に、熊を特別視し人知を尽くして罟を仕掛ける方法が東日本のものと類似していることに注目している。

最後に、新潟大教授、池田哲夫氏が「シベリアへとつながる漁撈技術」と題し、日本と大陸の文化交流の一事例としてイカ釣り技術の朝鮮への伝播を取り上げている。

現地を訪れた著者たちは、油田開発による生活環境の破壊を目撃し憤る一方、民族文化の保存と紹介に努めるハンテ人研究者の姿に感銘も受けている。本書を契機に、古層的でユニークな観念・モチーフを多く残す西シベリアの儀礼や口承文芸と、遠く離れた東アジア、日本との比較研究が活発化することを期待したい。興味深いことに近年の研究では、ハンテ人・マンシ人に多いY染色体DNA(N)が二万二千〜四千年前頃に東アジアから反時計回りに北西ヨーロッパ方面に向かったと推定されているのである。(直野洋子) (二〇一五年十二月／本体三六〇〇円)

『国際昔話話型カタログ 分類と文献目録』

ハンス・ライエルク・ウター著
加藤耕義訳、小澤俊夫日本語版監修
小澤昔ばなし研究所刊

待望のA T U日本語版が刊行された。原書のウター著『国際昔話話型カタログ』アン・ティ・アールネとステイス・トムソンのシテムに基づく分類と文献目録―は、フィンランド学術アカデミーの学会誌であるF F C二八四(二八五、二八六)として二〇〇四年に初版が出版され、二〇一一年に第二版が出ている。通称アールネ/トムソン/ウターのカタログ、略してA T Uである(A T Uの書評は本誌第二十九号に掲載されているので参照されたい)。本書は、A T U第二版の話型記述、注、索引の全訳であり、さらに「文献/類話」「モティーフ一覧」などを原文のまま掲載し、原書にあるすべての内容を含む。原書は全三巻からなるが、日本語版では一冊にまとめ、二二七二頁の大冊となっている。

ウターのカタログの題名には、アールネ/トムソンのカタログ名にはない「インターナショナル」という語が入っている。この題名について、訳者が著者にその意味を尋ねたところ、「国際的に流布した昔話の話型」もしくは「国際的に流布した昔話の話型カタログ」と説明されたという。つまり、「国や民族や言語の壁を超えて、相互に影響し合い流布してきた昔話の特徴が端的に表されている題名である」(訳者あとがき)。

日本語版の話型記述は、話型番号、話型名、話の要約、モティーフ番号、コンビネーション、注、類話(人の類話)からなる。類話の項目は原書では「文献/類話」となっているが、「日本語版では、地理的な広がりをおかりやすく示すために、「類話(人の類話)」として地名だけを示し(凡例)ている。確かに、一見してどの地域に類話があるかわかる。その代わり「文献/類話」は原文のまま、話型記述と地域名称、民族名称一覧の後に収められているので、その話型についての重要な研究文献と合わせ、該当する地域や民族、言語グループの話型カタログとモティーフカタログを見つめることが可能である。廃止話型一覧、変更番号一覧、新話型一覧、モティーフ一覧、文献および略形一覧が続く。最後の索引は、「説話の内容の限定した範囲だけにしほって」「最も重要な事項、筋、筋の担い手や場所を含むモティーフを記録」(著者序文)しているが、その日本語訳を五十音順に組み替えて記載することで、日本人利用者の便宜が図られている。

巻末の訳者解説では、A T Uの成立、話型記述の変遷(四一〇番イバラ姫を例示)、話型とは何か、分類法、A T Uと日本の資料、日本における話型分類の歴史、日本の昔話と世界の昔話の比較、について述べられ、日本の昔話の国際比較研究のためのA T Uの活用法が示される。

ウターはA T U日本語版によって「日本の研究者や多くのメルヒェン愛好家が故郷の過去と現在の文化的な記録を補強し、異文化の多くの記録と比較し、ジャンル特有の機能と精神史の変遷を再調査するための、新たな活動に通ずることが期待される」(日本語版への序)と述べている。監修者と訳者にも同じ思いが共有され、研究者のみならず昔話を愛好する人たちにもA T Uを利用してもらいたいと考えて、日本語と欧文のページを分ける工夫がされたという。

ともあれ、現代において昔話の比較研究の礎となるA T U日本語版が刊行された意義は大きい。同時に、カタログは活用されなければ意味がない。私たちはA T U日本語版を活用して日本の昔話の国際比較研究を進め、その成果を還元することで、国際昔話話型カタログA T Uのさらなる改良に貢献していかなければならないだろう。

(二〇一六年八月/本体一八〇〇円) (間宮史子)

『日本文学源流史』

藤井貞和著
青土社刊

文学の流れを古日本語以来の数千年の範囲で見通す。神話期（ほぼ縄文時代）、昔話期（ほぼ弥生時代）、ブルコト期（ほぼ古墳時代）、物語期……。時代ごとに、さらに時代と時代とのあいだに源流があり、〈発生〉がわだかまる。アイヌ語も沖縄語も対等な位置にある。縄文時代と弥生時代とが交代する危機、農耕以前の文化と対立する稲作儀礼の開始というシヨックを昔話の基底に読み取る。

四七八頁をめくりながら反省させられる。顕微鏡をのぞくような学問であってはならないと意識しつつも、実証しやすい課題を私たちは用意がちなのではないか。

人身御供の伝承はいかに理解されるべきか。「差別」とは何か。「うつほ物語」が描くもの、「しのだづま」が物語るもの。歴史や文学が隠蔽してきたものを問い直す。「延喜式」の記事や『今昔物語集』の説話を見渡した上で、「死刑」を考え、「いじめ」を考え、「戦争」を考える。文学源流史を共に歩いた読者は、「沖縄」「福島」をも考えずにはいられない。

(野村典彦)
二〇一六年二月／本体四二〇〇頁

『岩木山の神と鬼』

島山篤著
北方新社刊

岩木山は山自体が御神体であり「御山」と崇められる。神と鬼について多くの伝承や文献があるが、異説も多く複雑である。著者は長年解明に取り組み、一書として結実させた。第一章「東遊記」やイタコ祭文にある安寿姫伝承は、説経節「山椒太夫」と関連があり、日光感精説話の一つであるとみる。弘前藩「津軽一統志」の記述は「和漢三才図会」の引用であり、丹後の者が入ると海が荒れるという「丹後日和」は郷言（土地のことは）で、藩による取締り以前に引退した老漁師によって行われていた「郷之古制」だったという。

第二章 鬼が巨大な鎌をもって一夜にして水路を引いたという伝承がある弘前市鬼沢の鬼神社には、鎌・鎌など巨大な農具が祀られている。それらは集落の農業水利権の正当性を主張するものであるという。山麓に散在する製鉄遺跡と刀鍛冶伝承、鉄製農具との関わりについても考察している。

土地の伝承や文献に限らず国内外に視野を広げ、比較検証を試みている。

(佐々木達司)
二〇一六年二月／本体二〇〇〇頁

『オニ考 コトバでたどる民間信仰』

山口建治著
辺境社刊

本書は、日本語における「オニ」という言葉の成立を中心に考察された研究書である。「オニ」は、通説では「隠」の転訛とされているところを、本書では「瘟」が語源であると結論づけている。表面上和語のように見える言葉が、実はその起源が漢語にあることを究明している。まず、第一章「オニの語源と瘟神」において、古代の中国南方の逐疫祭祀「儺」が「逐瘟」や「遺瘟」と呼ばれていて、この儀礼が日本に伝わることで「瘟」の音が和語化して「オニ」となる過程が考察される。そして、第二章「瘟神信仰の波紋」では、日中の鍾馗信仰を始め儺文化の比較をおこなう、中国の五道神が日本の武塔神、牛頭天王へと繋がる立証により、日中の儺の繋がりが考察される。最後に補章として「和語になった民間漢語」を掲げ、「うそ」など和語と見なされているが、「オニ」同様に漢語起源と推測される言葉が解説される。言葉の成立背景にある古代信仰を丹念に追い、日中の儺文化の広がりをも提示する研究書である。

(立石展大)
二〇一六年三月／本体二八〇〇頁

『日中韓の昔話 共通話型三〇選』

鶴野祐介編著
みやび出版刊

似ているようで違い、違うようで似ている。日本と中国と韓国の文化には、さまざまな側面でもそのような実感がある。親しみを感ぜやすい関係であるとともに誤解を生みやすい。そのような状況の中で、昔話という庶民に親しまれてきた文化を手がかりに、共通理解の糸口を探る試みには大きな意義があるが、比較のレベルを揃えるのが難しい状況があった。その意味で本書は画期的な意味をもつ。三〇の共通話型を選定して、各話型ごとに本文が掲げられ、細かな資料分析を踏まえた解説が付けられている。この解説を出発点として、読者は三カ国に共通する要素と相違点を具体的に知り、それぞれの昔話を改めて味わっていくことができるだろう。この「味わう」という作業が重要である。編著者によれば、東アジアの人々が共有するのは「アニメズム」と「陰陽五行説」である。読者が本書の昔話を味わいながら、日本昔話の東アジアに開かれた側面を実感していくことは、地に足のついた国際化に向かう重要な糸口になるはずだ。

(川森博司)

(二〇一六年四月／本体二三〇〇円)

『鍋沢元蔵ノートの研究 国立民族学博物館所蔵』(国立民族学博物館 調査報告一三四)

中川裕・遠藤志保編
人間文化研究機構国立民族学博物館刊

待望の書が刊行された。近代にアイヌ自身の手でアイヌ語を筆録するという業績を遺した幌別方言話者の金成マツや知里幸恵と並び、沙流方言話者の鍋沢元蔵もいわゆる「鍋沢ノート」を遺したのであった。昭和三十七年に労作のノートが火災で焼失しても心折れることなく一から筆録し直したという逸話には、アイヌ語を後世に伝えたいという不屈の精神が感じられる。本書収録の資料は焼失以前のものという点でも貴重であるうえに、言語学、アイヌ文学の研究が編集し、英雄叙事詩三編、神話三編、祈り言葉五編について原典のカナ表記に並んでアイヌ語ローマ字表記と日本語対訳がついている。解説も充実していて、五百ページを超えるボリュームも素晴らしい。

学術的な価値もさることながら、本書を手掛かりにしてアイヌ自身の手による伝統的な語りの復元は厚みを増して行くことになる。こうした堅実な仕事を積み重ねた先が、アイヌ語を遺そうとした先人達の思い描いた未来に通じていることを信じて。(安田千夏)

(二〇一六年三月／非売品)

『日本人』の心の深みへ「縄文的なもの」と「弥生的なもの」を巡る旅

松本憲郎著
新曜社刊

著者は精神科医。ユング心理学の立場から日本とアイヌの民話を分析し、その深層にあるものを「弥生的なもの」と「縄文的なもの」に分け、日本人の心性の二重性を分析したものである。弥生的・縄文的というところにはいささか抵抗を感じるが、著者は考古学、形質人類学、神話学などの広汎な知識を駆使し、アイヌと縄文人の心性を連続したものと見る理由を丁寧に説明している。後半は西欧、日本、アイヌの異類婚姻譚をとりあげ、その構造的な相違を人間Ⅱ「日常の意識」と異類Ⅱ「深層の意識」の関係の違いとして説く。縄文のものにおいてはその違いを常に自覚するが、弥生的なものでは相手が異類に属すと気づいたとき離別を生じる。そして日本民話にはその双方が見られ、それが日本人の成立過程と深く関わるといえるのが結論である。本書はこのようにユング心理学の手法をわかりやすく示しながら、アイヌと日本の異類婚姻譚の間に我々が漠然と感じていた違いを、明解に解きほぐしてくれている。

(中川裕)

(二〇一六年九月／本体二四〇〇円)

『聴く語る創る24 戦後70年戦争の時代を語りつく』

日本民話の会編
日本民話の会刊

本書は日本民話の会が二〇一四年度から例会テーマを「戦争の時代を語り合おう」と決め二〇一五年六月まで九回にわたり行われた。そして戦後七十年の企画としてこれまでの例会記録を中心に実体験と聞き取りを中心として纏めたものである。

本文は七章からなり、空襲、銃後、引き揚げ体験、原爆の体験、沖縄戦、中国での従軍体験など、それには思い出さなくてもない過去の記憶や、今話しておかねばという強い気持ちがかめられている内容である。

「私の大事な息子や孫を殺されたくありません、人殺しをさせたくありません」「国家権力による一方的な教育は決して健全なものではない」など、また日本人として決してなかったことにできぬ加害の現実にも触れている。

最終章は「民話と戦争」となっている。「本書が戦争の時代を伝承していくことの一助になれば」と述べられているように、それらの声を真摯に受け止め、涙と決意を持って読む一冊である。

(清野知子)
二〇一五年九月／本体一八〇〇円

『双葉町を襲った放射能からのがれてわたしたちの証言集』

目黒とみ子(聞き書き)・みやぎ民話の会編集協力
双萩会刊

放射能すなわち福島第一原子力発電所のことを私たちはどれほど知っていたのだろうか。双葉町の方々は何であったのだろうか。そこでの言説は放射能禍を逃れて遠隔地に居る子ども達が遭遇している現在と深く関わる伝えられたことと、伝わっていないことの狭間で現代人は歴史に例を見ない苦悩の中にいる。これは口承文芸学そのものへの試練である。

本書は放射能発電所誘致を町議会で決定した双葉町が放射能で町民の生活権を汚染されたの逃避行が語りこまれる。この言葉こそが歴史を作り、語られた事実こそが人々にとつての真実を磨き出す装置となるに違いない。

発刊の双萩会は双葉町から宮城県に避難した人の会である。今を生きる場への想いが宮城県花の萩に託される。町民の目黒とみ子氏が「みやぎ民話の会」と出会い、被災者の新たな命を紡ぐ自らの言葉への覚醒へと聴き探りをされたことに注目したい。語り・聴く四十四人の証言、言葉についての注釈、震災後の双葉町に関わる出来事、写真を取める。

(野村敏子)
二〇一六年三月／本体一〇〇〇円

『「こころ」は復興したのか』(現代思想)
二〇一六年四月臨時増刊号

青土社刊

本書は、東日本大震災の被災者のメンタル面でのケアに関する特集号である。三本の対談と十六本の論考、エッセイで構成される。

「こころ」の復興を支えるために、「本当の心のケア」と題した対談では、阪神・淡路大震災と東日本大震災で被災者の心のケアをした精神医学者などが、体験談や被災地の状況を説明しながら、心のケアの難しさや今後の課題を語り合う。そして、「こころ」の風景、「社会の精神分析」、「ケアの課題」というテーマで、各分野の専門家が臨床経験などを寄稿する。また、「文化のゆくえ」では、震災以降の美術や音楽、アイドルの被災地訪問、被災地の建築物を報告する。

書名では、「ケア」ではなく、「復興」という言葉を用いる。東日本大震災から五年経ち、被災地の復興は徐々にされている。しかし、被災者の「こころ」の支援はしているものの、十分とはいえない。「こころ」は再び元の状態になるのか。読者にそう問いかけているような気がする。

(関根綾子)
二〇一六年三月／本体一五〇〇円

『遠野の昔話 菊池力松さんのむすめたちの語り』

丸田雅子・田中浩子・小池ゆみ子・小林美佐子編

企画室・コア刊

岩手県遠野にはかつて菊池力松というすぐれた語り手がいたが、力松の語った昔話はほとんど記録されていない。しかし、力松の娘たちの語りから力松の語りを甦らせることは可能である。

本書は力松の三女菊池ヤヨ（13話）、五女須知ナヨ（20話）、孫菊池榮子（54話）の語った昔話記録。既刊の長女鈴木サツ、次女正部家ミヤの語り記録と併せると、菊池力松一族の伝承がほぼ明らかになる。その意味において本書は大変貴重な記録といえる。

家族間伝承を考えるとときには、何が同じで何が異なるのかを比較する必要がある。巻末にある「せやみ」話の継承についての小林美佐子氏の論考はこれに答える好論文で、力松の語った昔話を娘たちがどう継承しているかを詳細に論じている。一話しか示されているかと、他の昔話ではどうか、娘たちの語る昔話と佐々木喜善の『聴耳草紙』はどう関わるか、娘たち相互はどのように影響しあっているかなど興味がない内容である。CD付き。

(大島廣志)

(二〇一六年四月／本体二五〇〇円)

『柳田国男の手帖「明治三十年 伊勢海ノ資料」』

岡田照子・刀根卓代編著

伊勢民俗学会発行・岩田書院刊

女性民俗学研究者の先駆的存在、瀬川清子が生涯大切に所蔵していた一冊の手帖。師、柳田国男から贈られたものと思われる。手帖の前半は、二十三歳の柳田国男（当時は松岡國男）が静養のため滞在した伊良湖での見聞等、後半は東京へ戻ってからの備忘録と思われる。本書は、手帖全頁を実寸大カラー写真で掲載する。岡田氏が手帖との出会いから刊行までの経緯を述べ、刀根氏が記述内容を詳細に分析し、本手帖の資料的位置付けを試みている。手帖の記述から、民俗を採集する柳田の姿を浮き彫りにし、後に民俗学へと発展していく柳田の知のありように迫る。手帖は柳田自身が「伊勢ノ海資料」と題している通り、紀行文「伊勢の海」の基礎資料であり、それは「海上の道」構想の発端となる可能性を秘めたものである。なお、手帖の資料的意義については、福田アジオ氏による考察がなされており、手帖や日記から、柳田の論の根拠を解明する一連の研究に、一石を投じる貴重な資料として、期待を寄せている。

(高塚さより)

(二〇一六年十月／本体二五〇〇円)

『聖人・托鉢修道士・吟遊詩人 ヨーロッパに盲人の足跡を辿る』

永井彰子著

海鳥社刊

リユートを携え犬にひかれて歩む盲目の乞食と行軍する兵士。その彼方には首吊りにされた死体と車裂きの車輪が見える。乞食楽士は一体どこへ向かうのか、行軍する兵士は何を意味するのか。この「盲目の乞食が犬にひかれて歩む絵」（十五、十六世紀の「スイス年代記」より）に関心を持った著者が、ヨーロッパにおける盲人の歴史・生活史を辿る。盲目の聖女オデイルの伝説を巡る現地調査、六世紀ブルターニュの聖ハーヴェイにまつわる伝説、ルイ九世によって設立されたパリの救済院、さらにウクライナおよびユーゴスラビアの吟遊詩人、琵琶とリユートの歴史を研究の対象としている。そして犬にひかれる乞食楽士の絵の謎を解いていく。これらヨーロッパの盲人たちに関する事例の背後に浮かび上がってくるのは、教会や修道院などのキリスト教施設であった。本書は、筆者などの実地調査や当時の裁判での証言など歴史的資料だけでなく、ゲーテなどの文学作品を通してヨーロッパの盲人の歴史に光を当てている。

(横山ゆか)

(二〇一五年十月／本体二八〇〇円)